浦幌町のアイヌ語地名

後　藤　秀　彦

1．はじめに

北海道にはおよそ日本語では解釈のできない意味不明の地名があることは広く知られているところである。これらの地名が、後年名付けられた新しいものは別として、それらのほとんどがアイヌ語に起源をもつことは明らかであり、このことも広く知られているところである。

地名はその土地の「呼び名」である。その「呼び名」は古くから永々とその土地の人々によって継承され、使用されて今日に至っているものである。

したがって、地名は単なる固有名詞というだけでなく、その土地の具有する特徴や伝承、そしてその土地に住んでいた人々の思い入れまでも含んでいると言える。

谷川健一（1979）は、「地名はあらゆる固有名詞の中でもっとも変化しにくい頑固な性質をもっている。それと同時に、時代と共に自然にあるいは作為的に変化する。地名には変わらない面と変わっていく面の二面性がそなわっている。すなわち地名には時間の推移にしたがう多様性と、それを超えた同一性がみられる」と、地名の持つ固有の特徴を指摘している。

筆者はかって、「生剛」の地名に触れたとき、「生剛」の地名が一定地域の中に動き回るとともに、現在ではオリジナルの地とは全く関係のない地に定着してしまったことを指摘した（後藤、1981）。このように地名は柔軟であると同時にかたくなな面をもっているのである。

この小文では、浦幌町内に分布する地名のうちアイヌ語起源のものを抜き出し、検討を加えてみようとするものである。

なお、アイヌ語地名解釈では、次の各書を参考としたので明記しておく。

○永田方正（1891）『北海道蝦夷語地名解』
○知里真志保（1956）『地名アイヌ語小辞典』
○山田秀三（1971）『北海道の川の名』
○山田秀三（1984）『北海道の地名』
○井上寿（1985）『十勝アイヌ語地名解』
○土屋茂（1986）『南十勝のアイヌ語地名考』
○『角川日本地名大辞典』（1987）

2．研究史

浦幌町内に分布する地名等の研究の数は多いものではない。しかし、幕末に書かれた紀行文や日誌等に書き記された地名の中にその原義の解釈の加えられているものもあり、さらには上原熊次郎の『蝦夷地名考并里程記』のように専ら、地名に関する史料もある。また、松浦武四郎の一連の著作の中には数多くの地名が記載され、さらには時折り解釈も加えられている。

明治期に入ると、前述の『北海道蝦夷語地名解』などが刊行され、本格的な地名考察が始められたが、昭和初期には当時の国鉄が『北海道駅名の起源』を数版にわたって刊行を続け、たくさんの地名の原義が解き明かされた。

目　　次

浦幌町のアイヌ語地名……後　藤　秀　彦……2

写真説明：浦幌十勝川と十勝太遺跡群　写真右下から右上へヘアピンのように屈曲する浦幌十勝川は東流して太平洋へ注ぐ。その北岸の河岸段丘上には続縄文・擦文期を中心とする十勝太遺跡群が分布し、多くの情報を現代に伝えている（後藤秀彦）

また、知里真志保や山田秀三らの優れた研究が戦後になって発表され、「地名学」の確立にもおおいに貢献した。

さらに、山田秀三は地名学の研究を精力的にすすめ、東北地方を含むアイヌ語地名の解明に取り組まれた。そうした成果は、前記の書ばかりでなく全集としても刊行されており、地名学研究者にとっては必読の書となっている。

加えて、松浦武四郎の『東西蝦夷山川地理取調圖』などが刊本として復刻されるなど、地名研究の基礎資料の充実が図られ、角川書店の日本地名大辞典の刊行によって、北海道を含む全国の地名の様相が明らかにされつつあることも特筆されるべきことである。この『角川日本地名大辞典』で初めて浦幌町関係の地名が網羅的に、体系的に記載されることとなった。しかし、ここでもそのボリュームの関係などから小地名までも取り上げることは物理的に困難となり、浦幌町関係でも「大字」設定時代の小字名や現行地名に継承されなかったような古地名は省かれた。したがって、本当に小さな地名を拾い上げることは実態として困難であると言わざるをえないが、浦幌川や下頃川川沿いの一部の地名については『浦幌村五十年沿革史』の中で図示されているので参考になるが、その記載されている地名があまりにも訛っていてオリジナルの形がわからなくなっていたり、誤記されているものもあるので注意をする必要がある。

なお、十勝管内では最近井上寿が『十勝アイヌ語地名解』を、土屋茂が『南十勝のアイヌ語地名考』をそれぞれ上梓している。

以下、浦幌町のアイヌ語起源の地名について検討を加えていきたい。

3．浦幌町のアイヌ語起源の地名

十勝（太）　トカチ（ブト）

浦幌町内では、最も古くから古文書に見られる地名である。1635（寛永12）年の『松前旧事記』には「戸賀知・運別、産金の業を興す」とあり、この「戸賀知」が十勝の初出である。一方、十勝川河口左岸の集落を示すトカチ（ブト）が登場するのは、1643（寛永20）年のオランダの東インド会社の商船カストリクム号ド・フリースの『日本旅行記』のタカプチーあるいはトカプチーの地名である。この中でタカプチーは松前などと並んで人口の多い集落と記載されている。

また、国内の記事ではカタカナ・ひらがな・漢字表記の違いはあるものの一貫して「トカチ」と記載されることが多いが、1788（天明8）年の『寛文拾年狄蜂起集書』には「大とかち」、1857（安政4）年の『東蝦夷日誌』には「トカチブト」と記載されている。

トカチあるいはトカチブ（プ）トの地名は以前から謎の地名となっているもので、いくつかの説はあるが特定されていない。時代とともにトカチの地名の呼称範囲が拡大したり縮小したりして、オリジナルの形が見えなくなっているのかもしれない。山田秀三は「十勝はたぶん十勝川下流の辺の地名からできた名であろう」と現在の十勝太をトカチの地名の発祥の地であることを示唆している（山田、1984）。

これまで、トカチについては1808（文化5）年秦檍麻呂が『東蝦夷地名考』で「トカチベツ。古名トゥカプチ也。トカプチは女の乳の名なり。其地に乳の形に似たる丘有る故に地名となれりと酋長クショバック語りき」と述べている。1824（文政7）年には上原熊次郎が『蝦夷地名考并里程記』の中で「トカチ。トガプチなり。則沼の辺枯る所と訳す。トヲとは沼の事、カは上へ又は辺りなどと申す意。プは所と申す訓、チとは枯と申事にて、此川の中程にトカプチいふ大沼ありて蝦夷人共山中草深く通路あしきとて、此沼辺数年野火を付て焼枯したるゆへ地名になすよし。未詳。」と解釈している。松浦武四郎の『国名建議書』には「元名トウカプ。訳て乳之儀、此川口東西二口に分れ、乳の出る如く絶せぬが故に号しと申伝へ候」と書いている。永田方正の『北海道蝦夷語地名解』では「本名をシアンルルと云ふ。遠き彼方の海浜と云ふ儀。トカチはトゥカプチにて幽霊の義。昔時十勝アイヌの強望を悪みし詞なりと云ふ」と新しい解釈を試みているが、本当のところはわからないというのが本音であろう。

なお、十勝太のブトあるいはプト（put）は河口の意であり、即ち十勝川の河口の意味である。

浦幌（太）　ウラホロ（ブト）

1800（寛政12）年の皆川周太夫図に「ウラホロ」と見え、これが初出であろう。1808（文化5）年の『東蝦夷地各場所様子大概書』にも「うらほろ」とあり、以下、1856（安政3）年の『竹四郎回浦

日記』には「ウラホロ」、1857（安政４）年の『東蝦夷日誌』には「ウラポロプト」、1858（安政５）年の『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』には「ウラホロフト」、同年の『十勝日誌』には「ウラホロブト」などの記載がある。

『竹四郎回浦日記』に「此川少々上りウラホロと云処也」とあり、『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』には「此辺一面の平地蘆荻原多し。此処に人家三四軒有、是をウラホロフトと云也。（中略）ウラホロブト、是ウラホロ川すじの川口也」とあって浦幌十勝川に浦幌川が合流する地点をウラホロブトと呼んでいたことがわかる。

この地名もよく原義の分からないものの一つでいくつかの説が出されているが、特定はできていない。松浦武四郎は『東蝦夷日誌』の中で「源に笹多しとの儀」、永田方正は「オラポロ。川芎の多き・処。オラッ・オロの急言。オラプは川芎なり。一説にウラ㋕・ポロにして大霧の義」と解釈した。知里真志保は「やましゃくやく・の処」あるいはurar-poroで「霧が多い」とした。そのほかにウライポロで「大いなる網代」と訳した『北海道駅名の起源』の説もある。地元浦幌町では「オーラポロ」で「川尻に大型の葉の草の生育する所」と解釈しているが、これは疑問。

昆布刈石　コブカリイシ

1789（寛政元）年の『寛政蝦夷乱取調日記』では「こぶから石」、1808（文化５）年の『東蝦夷地各場所様子大概書』では「コブカライシ」、1856（安政３）年の『協和私役』では「コンポガルシ」、同年の『竹四郎回浦日記』では「コンブカルウス」、1870（明治３）年の『十勝七郡風土記』では「コンブカルウシ」などと記載されている浦幌町内でも比較的古くから見える地名である。

この名はKombu-Kar-ush-iで昆布・を採る・いつもする・処の意味。

前記の『寛政蝦夷乱取調日記』にはクナシリ・メナシアイヌの一斉蜂起の際に、おほつないからこふから石に向け立火したことが記され、昆布刈石の様子について「崎々陰に夷家共に有之候」と述べている。また、『竹四郎回浦日記』でも「此処よりまた山道。是も文化度切開の由。其迄は風波の暇を見て下道を通りし由也。爰も昔しは七八軒有しとかや。今はなし」と述べている。

オコッペ

1798（寛政10）年の木村謙次の『蝦夷日記』では「ヲユツヘ」とあり、「小川ヒトハネニハネルト云訳　同名二ツ」と説明され、1802（享和２）年頃の『東案内記』では「ヲコシヘ」、1808（文化５）年の『東蝦夷地各場所様子大概書』では「ヲコッペ」とあり、その中で「昼休所　壱ヶ所　梁間九尺　桁間四間、同草小屋　壱ヶ所」とあり、「是は当秋諸向帰郷通行多に付、新規取建候分」とある。同年の児山紀成の『蝦夷日記』には「からうして諸古豆閉（大洋）の番屋に入てかれひたうへ、蓑笠もぐしたり」とオコッペに番屋があったこと、付近の通行が不便であったことなどが記されている。

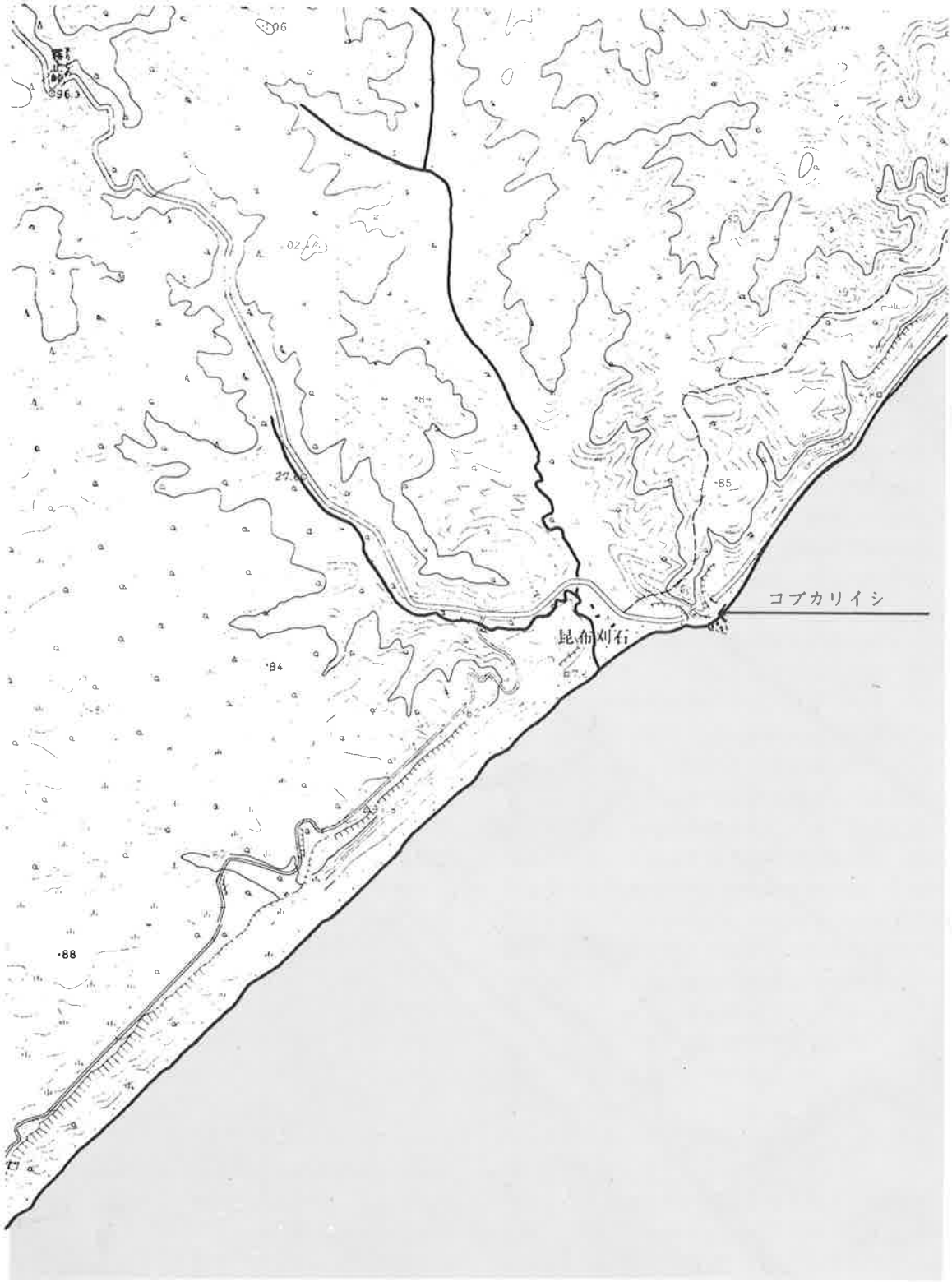
1856（安政３）年の『協和私役』では「ヲコチベ川」、同年の『トカチ場所支配人通詞番人稼方名前書』では「オコツヘ」、同年の『竹四郎回浦日記』では「ヲコツヘ」とあり、「砂浜、小流有。此処昼休所一軒（二十坪）有。惣て此辺南向也。扨此処の昼飯はトカチ領なれ共、上りの節はシャクヘツより持運び、下りの節はトカチより持越なりと。此処後ろに夷人小屋の跡有。昔六軒有しとかや。今はなし」と説明されている。1857（安政４）年の『東蝦夷日誌』では「ヲコッペツ・ヲコッペノッ」、同年頃の『東西蝦夷場所境取調書上』では「ヲコツヘ」、同年の『窄有日記』では「ヲコツヘイ」とあり、同年以降に書かれたと思われる『東西蝦夷場所境取調書上』では「此境目往古は今のヲコッヘを以て境と定め有之候に付、奥の方江役人共追々通行致し候様に相成に付」と場所境の変更について触れている。1870（明治３）年の『十勝七郡風土記』では「ヲコツペ」、1898（明治31）年の『北海道殖民状況報文〈十勝国〉』では「オウコッペ」と記載されている。

o-u-kot-peで川尻が・互いに・くっつく・もの（川）の意味。オコッペ沢川とポン・オコッペ川の河口部が海岸でくっついたり、離れたりしたことによるものと考えられている。

鼈奴　ベッチャロ

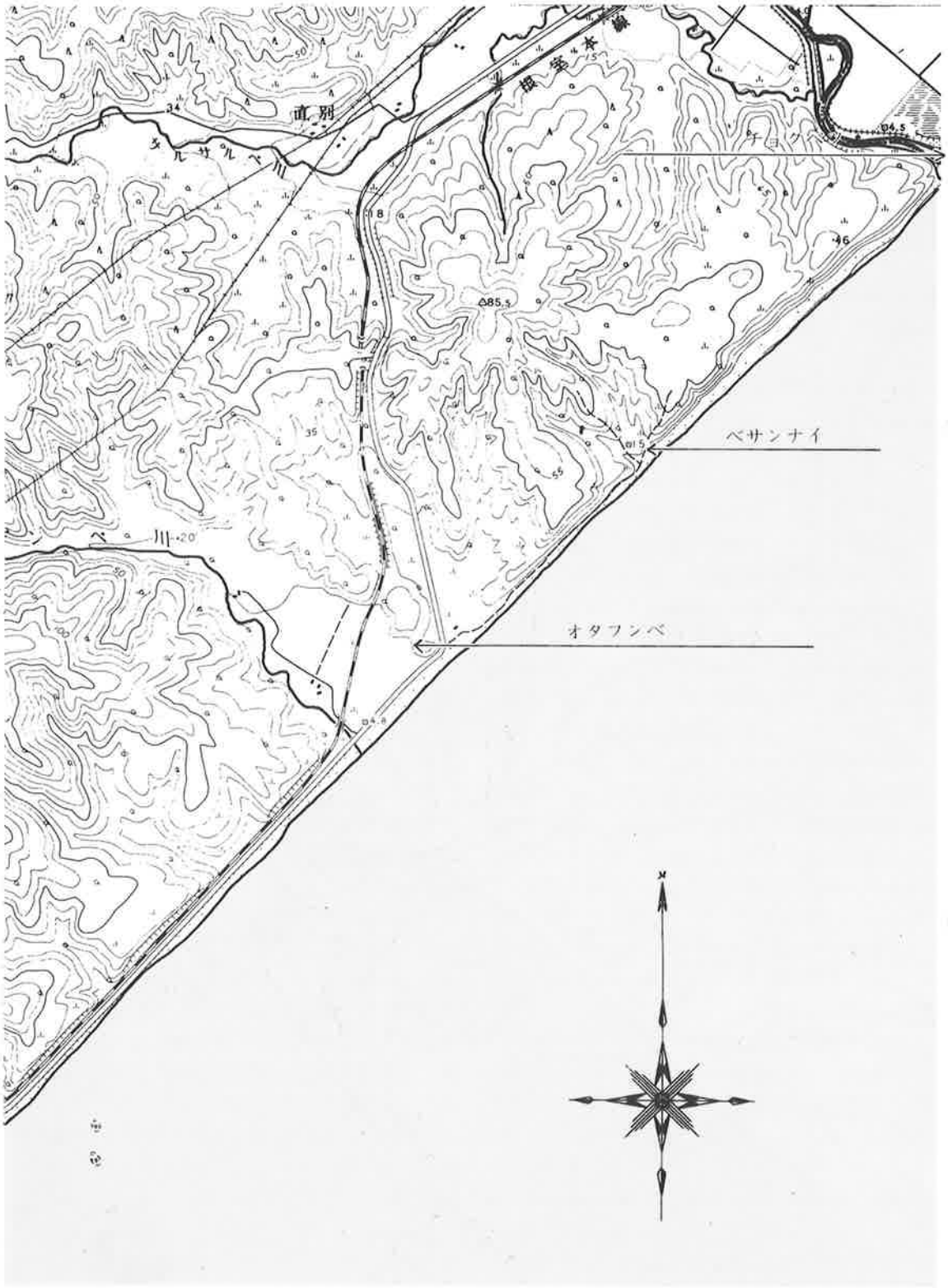
1800（寛政12）年の皆川周太夫の『十勝川踏査地図』では「ベツザリ」、1808（文化５）年の『東蝦夷地各場所様子大概書』では「へっちゃろ」、1856（安政３）年の『竹四郎回浦日記』では「ベッチャリ」、1857（安政４）年の『東蝦夷日誌』では「ベツチャロ」、1858（安政５）年の『戊午

Map　1　地名位置図（この地図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「旅来」を複製したものである）



Map　2　地名位置図（この地図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「厚内」を複製したものである）

Map　3　地名位置図（この地図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「厚内」を複製したものである）



Map　4　地名位置図（この地図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「厚内」を複製したものである）

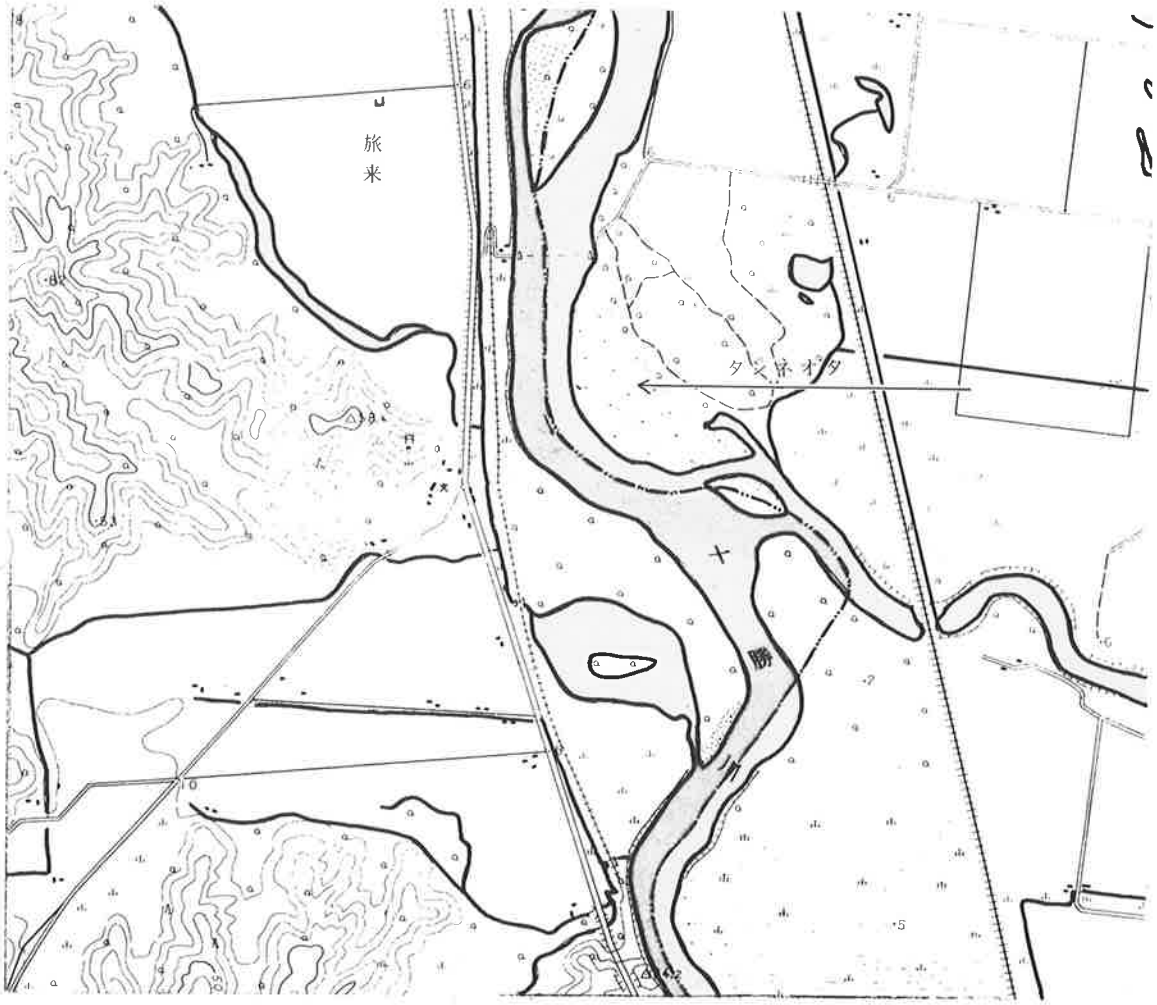
東西蝦夷山川地理取調日誌』では「ヘッチャラ」、同年の『十勝日誌』では「ベツチャラ」、1860（万延元）年の『近世蝦夷人物誌』では「ヘッチヤロ」などと記載されている。

pet-charで川の・口の意味。十勝川が分流する処を指し、他地域でも同じ地名のところがある。

直別　チョクベツ

1798（寛政10）年の木村謙次の『蝦夷日記』では「チュクヘツ（小川）秋ノ川ト訳」とあり、1824（文政７）年の『蝦夷地名考并里程記』では「チウクベツ」、1856（安政３）年の『竹四郎回浦日記』では「チョクベツ」、1857（安政４）年の『東蝦夷日誌』では「チョクベツ」などの記載があり、同年の『協和私役』には「チュクベツ川を渡る。舟渡なり。此をクスリ、トカチの境とす」とある。また、『竹四郎回浦日記」では「川有、巾十余間、刳木船にて渡す。此処クスリ・トカチ両持にして、隔年に渡し守を出す。一ヶ月給代六百文のよし、川向に夷家二軒有。両川岸に標柱を建てたり（東クスリ領　西トカチ領）。扨風波なく時は是より浜を行に宜敷、今日は風有て波が故に我々は是より陸通り十丁斗にして下り、此河源クスト・トカチの境目より来ると。魚類鮭・鱒・鯇・桃花魚・雑喉のみなりと」と、やや詳しい説明がされている。

前述の『蝦夷地名考并里程記』では「チウクベツ。秋の川といふ事。年々秋中に至れば、もより住居の夷人共、此川辺え来りて小魚を得、その食



Map　5　地名位置図（この地図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「十勝大津」を複製したものである）

になす故字になすといふ」とされ、松浦武四郎は『東蝦夷日誌』の中で「チユクベツ。訳をクスリにただせしに、本名チユフベツにて、昔川上え月の位の星が落ちし故号くと」とクスリアイヌの説を紹介し、さらに永田方正は「チュク・ペッchuk-pet（秋・川）。夏日水涸れ、秋大いに漲る」と解釈した。

何故かはわからないが、chu-petで秋・川であはることに間違いはない。

乙部　オタフンベ　オトベ

オタ・フンベの転訛。1856（安政３）年の『協和私役』では「ヲトンベ」、同年の『竹四郎回浦日記』では「ヲトンヘ」、1857（安政４）年の『東蝦夷日誌』では「ホンヲトンベ」の記載が見える。転訛の早かった地名のようで「オタフンベ」の記載は確認できない。現在残されている字名は「オタフンベ」である。ota-hunpeで砂・鯨の意となる。隣接して国史跡のオタフンベチャシ跡があり、このチャシにまつわる伝承が白糠町などで収録されており（酒井、1907・佐藤、1954・更科、1972）、同様の伝承は道南の乙部町などにも残されている。

生剛　セイゴウ

オペツコワシの転訛。1856（安政３）年の『竹四郎回浦日記』には「ヲベツコウシ」とあり、「此処えも壱人引越し来リ居由（脇乙名ヲトリ家内四人）」、1857（安政４）年の『東蝦夷日誌』には「ヲベツコワシ」、1858（安政５）年の『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』には「ヲヘツコウシ」、同年の『十勝日誌』には「ヲベッコハシ」、1873（明治６）年の『開拓使事業報告（第１編）』には「オヘチコカシ村」、1875（明治８）年の『石狩十勝両河紀行』には、「十勝郡ヲベツコアシ村）、1876（明治９）年の『開拓使事業報告（第１編）』には「生剛村」記載が見える。このうち、最も詳細な記載をしているのは『戊午日誌』である。オコツコワシは、十勝川下流域のコタン名として登場するが、明治期に入ると十勝国51ヵ村のうちの１村となり、初めは「オヘチコカシ村」などとカタカナ表記であったが、明治９年からは漢字表記となった。それも、当初は「生剛」と書いて「オベツコワシ」と呼ばせていたが、次第に音読が定着して「セイゴウ」と呼ぶようになったようである。

また、初めは現在の十勝太西部の浦幌十勝川が大きく丘にぶつかって右へまがる、文字通りの地点をオベッコワシと称していたが、度々その位置は変更となり、現在では全く地名とは関係のない場所に「生剛」の地名が残されている（後藤、1981）。

地名のオベッコワシはo-pet-ka-ushi-iと分解され、尻を・川の・岸に・くっつけている・もの（川）の意味であり、川が大きく蛇行して丘にぶつかっている様を指している。

なお、生剛村は明治45年、村名を浦幌村に改めた。

愛牛　アイウシ

アイウシニ・ウシの転訛。1857（安政４）年の『東蝦夷日誌』には「アシネシュム」、1858（安成５）年の『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』には「アシ子シュム」とあり、「右のかた野原也。其名義は昔梅の木一本有りしによって号るとか也。其根よりしてまたまた小枝多くわかれて有りしによって依るとか也。此処人家六七軒左り岸に立並びたり」と、その状況を記載するとともに、在住している６軒の家族内容等を紹介している。また、明治期に入ると1873（明治６）年の『開拓使事業報告（第１編）』では「廬根臼村」、1875（明治８）年の『石狩十勝両河紀行』では「十勝郡アエネウシ村」、1876（明治９）年には「愛牛村」と表記され、現在と同じとなっている。明治初年に十勝国内の１村として設定されたが、隣接する生剛村や大津村に依拠することが多く、村としての実態はなく、明治39年生剛村と合併して、同村の大字となった。

地名はaiushni-ush-iでせんの木・群生する・処の意味。

統太　トウフト

to-putと分解され、沼の・口の意味。浦幌川の河跡湖から流れ出る付近を指していった地名。古文書類には見られない。同類の地名は各地に見られる。

ウツナイ

ut-naiと分解し、肋骨の・川の意味。本流から分かれた川が再び下流で合流しているような状態の川を言う。同様の地名は各所にあるが、これは十勝川下流部の地名。1880（明治13）年頃から盛んに鮭漁が行われた所。古文書類には見えない。

ヌタベット

地内に所在するヌタベット沼に由来する太平洋岸の地名。1857（安政４）年の『東蝦夷日誌』では「ヌタベト」、1858（安政５）年の『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』でも「ヌタベト」とあり、「右のかた小川。其名義はのた計の処なるが故に号る也」と説明が加えられている。また、『十勝日誌』には「過てタッタラ、ヌタベト。人家三軒。向にウラホロプト」とある。

この地名について永田方正は「曲川」の意味と解釈しているが、ヌタプペツトウで「曲がりくねった川を持つ沼」の意との見方もある。

下頃辺　シタコロベ

1857（安政４）年の『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』には「シタコロベ」とあり、「左りの方大川也。此名義不解の由」とその意味が不明であることを指摘している。山田秀三によれば「犬を産みたる処、まかんばを持つ川、まかんばを採る川」の意であるという。

トイトッキ

to-etok-iで沼の・奥の・処の意味。このあたりは昔、沼であったものと考えられる。現在の豊北地区の一部。

ラエベツブト

ray-pet-putで死んだ・川の・口の意味。来別太と表記することもある。太平洋岸に沿って細長く位置する地帯の地名で、古文書等には見られない。

ベサンナイ

pesa-un-naiで、湿地内にあって夏になるとクマシカがそこへ入ってのたうちまわる場所・そこにある・川の意か？。1856（安政３）年の『竹四郎回浦日誌』には「ヘサンナイ」、1857（安政４）年の『東蝦夷日誌』には「又風波の時はベサウシナイ上りて山を越、雑木原を下り、此川端を出るに宜し。此川口に紫色の小石有」とあり、往時、海岸線の通行が難しかったときには、丘の上のベサンナイを通行したことが記録されている。また、1886（明治19）年の『北海道巡回紀行』には「ヘサニナイ」とある。

オニオップ

o-ni-o-pで河口に流木の寄り集まる川の意。1798（寛政10）年の『蝦夷日記』には「ヲニヲフ」、1856(安政３)年の『協和私役』にも「ヲニヲフ」、1857(安政４)年の『宰有日記』には「ヲニヲツ」、同年の『東蝦夷日誌』には「ヲニヲ」とあり、「小沢」の説明が付されている。

クマ子ヒラ

knma-ne-piraで横棒・のような・崖の意味。1805（文化２）年、幕府はクマネ平・昆布刈石・オコッペに新道を開削した。1856(安政３)年の『竹四郎回浦日記』には「クマ子ヒリ」とあり、「此所へ下る。此処も昔し二軒有して。今は無」とあり、1857（安政４）年の『東蝦夷日誌』には「クマネ平」と見え、大崩平との説明が加えられている。

ベツモシリ

pet-mosirで川中の島の意味。1857（安政４）年の『東蝦夷日誌』には「ベツモシリ」で「蘆荻島有」とあり、1858（安政５）年の『戊午東西蝦夷山川取調日誌』には「ヘツモシリ」で「一ツの島有、蘆荻多く生たり」、同年の『十勝日誌』には「ベツモシリ」とある。浦幌十勝川河口近くの中洲を指す。

ピパウシ

pipa-usiでカワシンジュガイが、そこに群生するする・処の意味。共栄の浦幌川支流の小河川。古文書類には見られない。

静内　シズナイ

1857（安政４）年の『東蝦夷日誌』には「シチネイ」とあって人家２軒があったことが記され、1858（安政５）年の『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』では「シチ子イ」と表記されて人家３軒があり、ヤヌカル家・イカンチハ家の家族名が記され、同年の『十勝日誌』にも「シチネイ」、1898（明治31）年の『北海道殖民状況報文〈十勝国〉』には「シツナイ」と見える。これについて、永田方正はshittuneiで「両山の間」と解釈をしている。一方、山田秀三はshut-naiで「山の裾の・川」ではないだろうかとの解釈をしている。『浦幌町史』では「澱粉と糟とを分けた沢」との解釈をしているがこれは疑問。さらに松浦武四郎は「少し天気が続くと干し上がる」から名付けられたとしている。

ワワウシ

1857（安政４）年の『東蝦夷日誌』に「ワ、ウシ（渡場）、人家三軒（コンラハ、カンナムツ、イカレキハ）有。是よりヲホツナイ迄陸路一里」とあり、浦幌十勝川河口近くの渡場をいう。

『地名アイヌ語小辞典』では「wa-wa-us-河中の徒渉場で人々がいつも渉り渉りする所」としている。同様の地名は広尾町や大樹町にも見られる。

タンネオタ

tanne-otaで長い・浜の意味。十勝川の沿岸の地域。『天保郷帳』には「トカチ持場之内、タンネヲタ」とある。松浦武四郎の『初航蝦夷日誌』の「蝦夷地行程記」にはタンネヲタに「夷家有」、1855（安政2）年のアイヌ住民は6軒、37人と記録されている。『竹四郎回浦日記』には「タン子ヲタ、当時五軒（シュテシ家内八人、コアテカアイノ家内七人、エシカトコロ家内八人）内三軒当所に住し、一軒（カモエヌンカ家内九人）トフマヲカへ引越、一軒（ウナハヌ家内六人）ヲサウシへ引越居るよし。又当所えトカチより一軒来り居るも有よし、扨此カモエヌンカ（五十一才）親父イサルクマは当年八十三才、母ヤリケは八十才なる由。またコアテカアイノ（六十二才）の母も八十才になる由聞たりける」とあり、『戊午東西蝦夷地理取調日誌』ではより詳細に「左りの方平場、其処小川有。タン子ヲタは、此処長く砂浜がむかし有りしによって号るとかや。南岸人家六軒有。是をタン子ヲタ村と云り。家主エンカトコロ㌶、妻イカヌフマツ㌶、倅ヌクレコレハ㌶、二男ヤヲコタマ㌶、三男市蔵㌶、四男一人㌶、五男一人㌶、娘ウナマツ㌶、同マツ子サン㌶等家内九人にて暮しぬ。余此家え当春泊りしが、其家主エンカトコロは当夏死せしとかや。倅も二男も三男もだれも未だ浜より返り来らずとて、後家と子供は我が面を見て、なつかし気に泣しまゝ、米一升・烟一把遺して出立。其向に家主コテカアイノ㌶、妻アハフニ㌶、母イセンケ㌶、倅アニトエ㌶、娘ヲシヨロウシ㌶、娘シャクシマツ㌶等八人にて暮しぬが、其娘と倅は雇に下られたり。また其下に家主ウナハヌ㌶、妻イコウラ㌶、母シテムレ㌶、倅ラカトク㌶、娘一人㌶、娘一人㌶、弟サンノ㌶、妻トエマツ㌶等家内八人にて暮しぬ。其内家主兄弟は雇に下られ居たり。また少し下りて家主シトレケレ㌶、妻ソコツ㌶、父シユラレケ㌶、母エベチャロ㌶、娘一人㌶、伯父モ子ア㌶、甥ノトン㌶等家内七人にて暮しぬが、其内家主と伯父とは雇に下りたりと。また少し下に家主イサリクマ爺㌶、妻ヤリケ㌶、倅カモエヌンカ㌶、妻フリカンナ㌶、孫コエヒラサ㌶、同チャリアナ㌶、孫女カリン子㌶、同一人㌶、等家内八人にて暮しけるが極老夫婦、に有ける故、それらに米・烟草等遺しぬ。其家主と孫とは雇に下られたりと、またしばし下りて家主シ子アテ㌶、妻シエヌ㌶、母ナンコヤン㌶、姉エンラヲクヌ㌶、娘サエニイ㌶等家内五人にて暮し、其家主と姉とは雇に下られたりとかや。此辺川巾ひろく凡巾弐百間にも及ぶ也。西岸にチャシ跡ツ様の山有也」とある。この「チャシコツ様の山」とはその位置関係から十勝川右岸の旅来チャシ跡であると考えられる。

4おわりに

浦幌町内の主に海岸線に残されている地名について、その知れるところを記してきた。もとより残されている地名の数は、ここに紹介した数倍もあり、一挙に紹介することはできない。特に、内陸の地名は残されているものの方が少なく、字名の改正などに伴い減少し、消え去ってしまうものも多い。地名が土地に刻まれた文字である以上我々の具有する歴史の一部分として、保護していかなければならない対象であることは論議を待たないであろう。

今後も、機会をみてこうした課題に取り組んでいきたいと考えている。

（浦幌町郷土博物館学芸員）

引　用　文　献

後藤秀彦（1981）「生剛という地名についての覚書」『浦幌町郷土博物館報告』18
酒井章太郎（1907）『十勝史』
佐藤直太郎（1954）「乙部（オトンベ）のチャシコツ」『釧路博物新聞』94
更科源蔵（1972）「アイヌ文学を探る28　ハチの神謡」『北海道新聞』7月15日付夕刊
谷川健一編（1978）『地名の話』
山田秀三（1984）『北海道の地名』

１９９１年３月２０日　印　刷
１９９１年３月３０日　発　行
編　　集　後　藤　秀　彦
発行責任者　石　川　安　次
発　行　所　浦幌町郷土博物館（089-56）
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地１
印　刷　所　大同出版紙業株式会社（080）
北海道帯広市西７条南６丁目